

## 大野市脱炭素推進会議 第2回脱炭素ワークショップ 議事メモ

日時 令和6年8月21日(水) 午後7時～午後9時

場所 結とびあ 201・202号室

### ○出席者

委員：8名(1名欠席)

事務局：5名(環境・水循環課職員)

### 1 座長あいさつ

本日のワークショップのテーマは結。つながり、連携、ネットワークといった言葉に関連するアイデアをいただきたい。また、脱炭素ビジョンの基本戦略には「コネクト 2050」と掲げており、将来に向けてという視点からも意見をいただきたい。

### 3 第1回の振り返りについて

資料に基づき事務局から説明

### <意見交換>

委員：アイデアに関する取組事例の成果を教えてほしい。

事務局：他地域の取組事例の成果は把握していない。市内に関して言うと、例えば、市がライトダウンキャンペーンを続けていくうちに、阪谷小学校児童が企画する阪谷スタポポイントプロジェクトと一緒に行動しようという話になった。

委員：牛の糞ともみ殻を混ぜて肥料を作る方法がある。この肥料は里芋の栽培にも利用されている。また、もみ殻のくん炭は田んぼの消毒効果がある。

委員：市のJ-クレジットの取組状況は。

事務局：森林由来のJ-クレジットの創出に向けて関係課と検討を重ねている。J-クレジット創出支援事業者が言うには、市の森林経営計画どおりに森林施業を進めることができればクレジット化は可能とのことであるが、それができるかどうかは課題。

委員：子どもの方が大人よりも環境意識が高い。大人がごみを出しているという子どももいる。大人向けの環境教育が必要。

委員：家庭への薪ストーブの導入を支援することも良いが、市民が薪を日常的に購入できる環境を整えることが重要。

事務局：市内で薪を購入しにくくなっているという話を聞く。

委員：薪ではないが、市内の工務店では木材加工で切り取られた端材が余っている。捨てるにしてもお金がかかるので、必要としている人に渡した方が両者にとって好都合。市がマッチングしてはどうか。

事務局：その端材は市産材なのか、または、県産材なのか。

委員：産地は特定できない。

委員：昔は銭湯のお湯をおがくずで沸かしていたが、段々とおがくずが手に入らなくなり、今ではほぼすべてがボイラーに切り替わった。

委員：森林整備にはお金がかかるが、J-クレジット制度の開始により、クレジットから生まれた収益を森林整備に活用できる仕組みが可能となった。県外の自治体では薪をふるさと納税の返礼品に出品している地域もある。上越市では雪室を推進しており、ワインのブランド化に成功している。廃校を雪室に活用している地域もある。滋賀県の琵琶湖周辺では、用水路を家の中に引き込んで使う「カバタ」という取組みを行っている。さまざまな手法で脱炭素を図ることが可能であるが「今すぐに行うこと」と「100年先を見据えて行うこと」を区分して考えることが大事。

#### 4 ワークショップ

2班に分かれて、「結（協働、ネットワーク）」を生かした脱炭素の取組み」についてアイデア出しを行った。終盤にそれぞれの班のアイデアを発表し、共有した。

※委員からの意見は別添「ワークショップアイデア等一覧」参照

#### 5 座長から講評

ワークショップでは、これまで組み合わせたことのない要素を組み合わせる新たな価値を作っていた。これを「イノベーション」といい、脱炭素化の手法を考える上で有効である。

#### 6 閉会

>>終了

## 第2回脱炭素ワークショップ アイデア等一覧

別紙

テーマ 「結(協働、ネットワーク)」を生かした脱炭素の取組みを進めるためには、「誰がどうする」と良いか。			
No.	誰が	どうするか ※原文のとおり	班
1	市民	ドイツの分別 ごみが成功したのは、子ども→大人	A
2	市民	こども→大人 こども先生	A
3	市民	市民→行政 CN市民会議	A
4	市民	市と農家さん脱炭素農業ツアーを実施する	A
5	市民	市と個人の取組み 生ごみゼロ 家庭で処理→方法 無料の生ごみ処理機 我が家では堆肥枠に入れて土にする	A
6	市民	さかだに雪まつりでPRを行う(自治会と事業者)	A
7	市民	建設重機から出る、廃油のリサイクルか廃油ストップ エンジンオイル、てんぷら油	A
8	事業者・団体	事業者の会員が多い 団体(ライオンズクラブ、ロータリークラブ、青年会議所等)の会合にて脱炭素のセミナーを開催し各自が今取り組むべき課題を認識してもらう	A
9	事業者・団体	事業者→事業者 設備などの共同利用、協同組合	A
10	事業者・団体	会社で取り組む→従業員に浸透する	A
11	事業者・団体	異業種が集まる団体でセミナーをすることで横のつながり・意見交換ができる	A
12	事業者・団体	市内事業者と市民と一緒に市内全域のごみ拾い大会を行う	A
13	事業者・団体	雪室のDIY	A
14	事業者・団体	事業者の食品ロスをこども食堂に提供する	A
15	事業者・団体	「事業者」が雪の利活用について説明する場を設ける(市民に向けて)	A
16	事業者・団体	個人のコンポストで作った堆肥を農業者が利用する	A
17	事業者・団体	「大学職員(研究員)」が「学校」でCNIについての出張講座を行う	A
18	事業者・団体	事業者→市民(小売) フードロス削減 消費期限ギリギリ 商品の積極的販売	A
19	事業者・団体	金沢のひむろ まんじゅう →雪室	A
20	事業者・団体	ホームカミングディ(大学)植樹したのを見に来る	A
21	事業者・団体	つるが→ごみが減ると預金の〇〇が〇〇するなどの商品を作る	A
22	行政	LED補助	A
23	行政	県の認定とりましたよ プロジェクトを大野市でつくる	A
24	行政	岩倉市と自然ふれあい探検隊で植樹	A
25	行政	「市役所」が管理する雪山を「市民」「事業者」がシェアして利用	A
26	行政	「市役所」「事業者」が雪室で保存したい食材を「市民」から募る	A
27	行政	市と事業者で環境フェアを実施する(農家さんの取組も紹介、試食)	A
28	行政	月に1回同時にノーマイカーデーをして帰りは、市内飲食店で食事して帰る	A
29	行政	事業者のCO2排出量の測定し、支援を市が行う(補助金等)	A
30	行政	市が脱炭素取組コンテストを開催し市民が参画する(意見のすい上げ)	A
31	行政	各事業者が取り組んでいる、脱炭素事業の自慢大会をする PR、フェア	A
32	行政	行政→市民、事業者 認定、表彰制度の創設	A
33	行政	行政→行政 大野市と他市との連携	A
34	行政	市と木材を扱う事業者さんで端材のマッチングを行う	A
35	行政	市がカーボンニュートラルの日を制定し事業者がノーマイカーデーとか乗り合い、ノーマイカーデーに取り組む	A
36	行政	行政→市民 ハピコイン付与 回収ステーション	A

No.	誰が	どうするか ※原文のとおり	班
37	市民	六呂師高原に星の環境大学をつくり若者を呼び込む	B
38	市民	地域でお年寄り、こどものクールシェアリング(夏休み)	B
39	市民	事業者の廃油でエコキャンドルイベントを開催	B
40	市民	市民が薪の代わりに廃棄木材を工務店から調達する	B
41	市民	不用品持ち寄り市を定期的に開催 してごみを減らす バザー	B
42	市民	市民が無料で使える無人タクシーを導入	B
43	市民	市民が無料で使える自転車を街中に配置	B
44	市民	市民の車にステッカーを貼り、タクシー代わりに使える	B
45	市民	大野市外の事業者×大野市民 定期的なテレワーク推奨(市が実績に補助)	B
46	事業者・団体	JRが定期利用者にポイント還元	B
47	事業者・団体	生協、郵便局、宅配等の共同輸送	B
48	事業者・団体	バス、タクシー業者、郊外自治会(市)とオンデマンド×EV車導入	B
49	事業者・団体	脱炭素推進会議を中心としたメンバーで環境イベントを実施	B
50	事業者・団体	廃棄物をとことん利用する→木材、ふん、野菜	B
51	事業者・団体	事業者-市民 市内の木を扱う業から出た廃材を格安にて市民に販売	B
52	事業者・団体	企業が市と県民生協主催のフードドライブに参加し食品の量を増やす(寄付)	B
53	事業者・団体	段ボールコンポスト、段ボール雪室を開発する。安価で発売	B
54	事業者・団体	生産者をまきこんだフードドライブ	B
55	事業者・団体	工務店から出た端材を銭湯で使う(地域おこし協力隊がコーディネーター)	B
56	事業者・団体	車を乗り合わせて出勤する。(ガソリンを抑えられる)コミュニケーション	B
57	事業者・団体	事業者-市民 古米を利用した料理を研究発表(コラボでも他)	B
58	事業者・団体	稲わらを利用したい人を募る	B
59	事業者・団体	おがくずを利用したい人を募る	B
60	事業者・団体	もみ殻を利用したい人を募る	B
61	事業者・団体	中竜鉱山で雪室を行う	B
62	事業者・団体	越美北線のハイブリッド電車化	B
63	事業者・団体	越美北線と森林組合の連携で木材を運ぶ	B
64	事業者・団体	市民から廃油を集め越美北線を走らせる	B
65	事業者・団体	町内会・自治会で小水力・マイクロ水力導入 地域の施設にて利用	B
66	事業者・団体	宅配事業者が市民と(に)置き配BOX普及	B
67	事業者・団体	再エネ・脱炭素の取組をしている商店で買い物するとポイント付与	B
68	事業者・団体	エネルギーシェアリングを検討する。電力、熱、交通	B
69	行政	学校で環境教育 今回のワークショップのような取組を継続(アイデアコンテスト)	B
70	行政	学校でCO2排出量測定→削減取組で競争(省エネプログラムを考える)	B
71	行政	ごみ集積方法の改善、混ぜない(集積センターだけでも)	B
72	行政	東京や大阪といった特定都市と協定を結び生産したエネルギーを消費する見える関係	B
73	行政	大規模な雪室を作って、共同利用する。付加価値化を低コストで	B
74	行政	学校が、間伐材を活用した授業(工作や作品イベント)	B
75	行政	行政-団体-市民 市とキャンパーとコラボ配信。大野市に人を呼ぶ、大野産の薪を売る、事業者が薪を作る	B
76	行政	行政-事業者 Jクレジット用の森林と販売用(例)薪の木材を計画的に育成	B
77	行政	行政-市民 冬の雪を保管、夏に解放して雪を使ってスポットクーラーにて節電	B
78	行政	市と車屋さんでエコカーイベントを開催する	B
79	行政	生ごみ処理のアイデアコンテストを市が開催して市民を表彰	B
80	行政	大野市蓄電所	B
81	行政	市と団体が連携してアフリカ村を1週間開催(市民参加)水や電気の使い方が見直せる	B
82	行政	行政-事業者 エネルギーのネットワーク化(太陽光パネル)	B
83	行政	市が事業者の省エネ手法について研修会を開催する	B
84	行政	前向きコンパクトシティ、集落の集約化を進める	B